亮磨は今さらながら、さちのおかれている状況を思い知らされた。
さちは、ただひたすら暗闇のなかを走りつづけている。コースを自分の目で確認することはもちろんできない。尻尾を振りながら、散歩するかわいい犬を眺めることもできない。公園に咲く、季節の草花を楽しむこともできない。
目隠しをされた状態で、二時間も、三時間も、ルームランナーを走らされると考えるとぞっとする。でも、さちのことを考えたとき、それは決して大げさな想像じゃないのだ。
「あのね、できればでいいし、もちろん余裕がある状態のときでいいんだけど」と、さちが遠慮がちに言った。「走ってる最中に、何か目をひくような景色とか、きれいなものとかがあったら、簡単でいいから、教えてくれると助かるかも」
そう言われた瞬間、ぱっとひらめくように理解した。目が見えない相手でも、景色は共有できるんだ。俺がありのままをつたえればいいんだ。俺の言葉によって、さちをとりまく暗闇に、ほんの少しでもいろどりがくわわれば……。
「私って、わがままかな？」さちが、走りながら、不安そうに首を傾ける。「やっぱり、大変？」
「いや、そんなことないです！」
視覚障害の競技者を、できるだけ快適に走らせるのも伴走者の役目なんだ。景色や、咲いている花や、変わった情景を教えて、気分転換させたり、テンションを上げてもらったりすることも大切なんだ。
「俺がさちさんの目になりますから！」

心を殺して伴走マシーンになる――そう誓った矢先に、感情的なことを口走ってしまった。あわてて、つけくわえた。

「もちろん……、廉二さんもいるわけですし」

亮磨とさちの足音は、寸分のくるいもなく、重なっている。もはや意識しないでも、ぴったりと腕の振りとストライドは一致させられる。いっしょに何キロも走っていると、ときどき、変な感覚におちいることがある。

二人で走っているのに、一人で走っているような、さちの体が自分の体の延長と化していくような、不思議な一体感を感じる。まるで、何年もいっしょにこうしてとなりを走ってきたかのような……。

ちらっととなりを走るさちを見た。髪を一つにしばっている。あらわになったうなじの後れ毛が、汗で濡れている。亮磨はあわてて、顔を前方に向けた。

だからこそ、感情を消さなければならない。余計な私情はさしはさまない。ちょっとでも心を許せば、あらぬ方向へ気持ちが傾いてしまいそうだった。さちを好きだと一瞬でも感じてしまったあのときの気持ちに。

「ありがとう」という、さちの言葉に、「いえ」と、短く返す。気持ちを引き締めなおした。

亮磨は前を見た。階段の横にスロープが設置されている。ジョギングコースはそのスロープを下らなければならない。狭いうえに、急な下り坂なので注意が必要だ。

「あと五メートルで、橋が終わります。スロープの下り坂です！」

いくらさちが駒沢公園を毎日のように走っているとはいえ、ここがいちばん危険なのは間違いない。

「三、二、一！」
目測で、距離を読む。
「はい！　下ります！」
勢いを殺すことなく、一気にスロープを駆けていく。平坦な道に出てから、さちが感慨深そうに言った。
「うまくなったねぇ。指示がスムーズになった。すごい安心感」
何も答えられなかった。べつに呼吸が苦しいわけじゃない。ありがとうございます、という、その一言が、喉の奥で引っかかる。それっきり、さちもだまりこんでしまう。
それにしても、あまりにもよそよそしすぎて、不審に思われるんじゃないかと考えた。この前も、廉二を巻きこんで、三人の空気をかなりぎこちなくしてしまった。感情を殺すにしても、もっと穏便な方法はあるはずだ。さちには、心地よく走ってほしい。たとえ暗闇のなかを走るとしても、楽しく走ってほしい。俺が心から願うのはそれだけだ。
少なくとも、走っているときだけは、明るく、楽しく接しようと思った。適当な話題を見つけようと焦っていたら、あらぬ言葉が飛び出てきて、自分でも驚いた。
「廉二さんと……」
「廉二君がどうした？」
「つきあってるんですか？」
バカか、俺は！　何、バカなこと聞いてんだよ！

さちの顔が真っ赤になる。
「すいません！」亮磨はとっさにあやまった。「今の、忘れてください」
高校の制服を着たカップルが、手をつないで歩いている。赤ちゃんの乗ったバギーを押しながら、颯爽とスレンダーな母親がランニングしている。世界はこんなにも光り輝いている。それなのに、なぜ俺は使い古された廃油みたいな、どす黒い、破滅的な感情を体のなかにためこんだまま、走る、という健康的な動作をしているのだろう？　心と体が、空中分解して、ばらばらになりそうだった。
さちがおずおずと答えた。
「今度のフルマラソン、目標を達成できたら、お願いしますって答えた、半年前。それまで待ってって、私は言った。廉二君は、わかったって」
さちの曖昧な言葉を、亮磨は頭のなかで整理した。
「つまり、三時間半を切れたら……ってことですよね？」
「そのつもりなんだけど……」
空き缶を靴の裏で押しつぶすように、嫉妬の感情を強く強く圧縮して、何も感じないようにした。それよりも、煮えきらないさちの態度のほうが気にかかる。亮磨はさちの言葉を待った。
「でもね、最近、廉二君、急によそよそしくなって」
「廉二さんが？」
一周を走り終え、ふたたびトレーニングルームの入り口に戻ってきた。あと、九周。ガラス張りになった

トレーニングルームのなかで、エアロビクスのような体操をしている女性たちが見えた。亮磨はさちの心中を察して、なるべく明るい調子で答えた。
「大会も近くなってるし、きっと練習のときは伴走者として、一線引こうと思ったんじゃないですかね？　陸上に関しては、バカ真面目な性格ですし」
「いや、プライベートでも、廉二君、すごく冷たくなった。最近ね、あの人がいったい何考えてるのか、正直、わからないんだ。もちろん、もともと私が表情をうかがうことができないっていうのもあるかもしれないけどさ」
　ドラマなんて、しょせんフィクションだ、つくりものなんだと愛には答えてしまった。けれど、もしかしたら私生活で起こる細かい感情の機微みたいなものを、映画やドラマやマンガは誇張して描いているだけで、根本はあまり変わりがないのかもしれない。まともな恋愛経験もない、未成年の自分が訳知り顔で答えてしまったことを深く恥じた。
　人に急に冷たくあたってしまうことも、たとえ自分のなかでは整合性があったとしても、その相手にとっては理不尽で、不可解極まりない行動にうつってしまうものなのかもしれない。俺がさちと必要以上に仲良くなるのをさけようと決意したのも、自分のなかでは正しい選択だと思っている。でも、きちんと理由を説明しなければ、さちには到底理解ができない。でも、俺はその理由を言うことができない。俺も苦しいさちも苦しい。結局、何も生み出さない。
「たぶん、廉二君、ほかに好きな人ができたんだと思う。それに、やっぱりさ、私は障害者だから荷が重く

なったんじゃないかな」
「そんな、まさか……」これ以上、さちを悲しませるのは、俺が絶対許さないから――廉二の吐いた言葉を思い出して、亮磨はいらついた。
もしかしたら、廉二もさちに対して何らかの後ろめたさや悩みを抱えているのかもしれないと考えた。さちは、それが理解できず、わかりやすい理由を見つけて、納得しようとしている。ほかに好きな人ができたから、私は障害者だから、と。互いの気持ちは離れていく一方だ。
「廉二君は、ケガする前は、もともと陸上で実業団に入るつもりだったらしいんだけど、四月から四年で、自分の夢をあきらめて、ふつうに就活をはじめたみたい。だから、きっと出会いもたくさんあるだろうし、ね」
さちさんを、泣かせたくない。絶対に。自分のしでかした罪を忘れかけて、そう純粋に願いはじめている。右手のロープをぎゅっとにぎりしめながら、亮磨は腕を振りつづけた。
「私自身もね、目が見えなくなってから、好きっていうのが、いったいどういうことなのかわからなくなっちゃって」
なんで、俺たちはもっと器用に生きられないのだろう？　亮磨は叫びだしたくなる衝動を必死でこらえていた。ただ、前を見すえて走りつづけた。
「だって、顔がわからないんだもん。声とか、その人の雰囲気――やさしそうだなとか、とげとげしてるなとか、そういう判断基準しかないから」

さちが、やわらかくまぶたを閉じた。
「生まれつき目が見えなかったら、顔が見えない相手をどう好きになるのかっていう判断基準がしっかりあるのかもしれないけど、私の場合、つい数年前に見えなくなったわけだから、もう何がなんだかわからなくなっちゃって……」
さちの息が少しだけはずんでいた。
「小鳥が卵から出て、最初に見た動くものを親って思うみたいにさ、私が廉二君のことをいいなって思ったのは、外に出てはじめて助けてもらった人だからかもしれないって。そんなことを疑っちゃう自分がすごく、すごく嫌になる」
返すべき答えが見つからなかった。そんなことはないですと、目の見える自分が言うのも、おかしい気がした。結局のところ、俺たちは深いところではわかりあえない。そんなあきらめの感情が深く手足をしばりつけている。
「とにかく……」何か言わなければいけないと焦り、あわてて口を開いた。「とにかく、かすみがうらで、三時間半を切りましょう。すべては、それからです。あと、三ヵ月がんばりましょう」
もし、達成できなかったら？　俺が足を引っ張ってしまったら？　気弱な考えはとめどなくあふれてくる。そんなネガティブな思考を、一つ一つ、ふりほどくようにし、俺たちは走っていくしかないと思った。

（朝倉宏景『風が吹いたり、花が散ったり』）